実記
義談
紀逸　上

913.5
ソ
3

園乃花第三編の序

於く花ハ花あり因に云あれど博識多く筆ハ
なき身ゆく古本乃中役ハ何きつまく見まきを
佐保山ハ奈良の都の東に當りて春
の萬物を養ふ氣なる御神佐保姫の
靈をまつる花の都なれば景色もよけ
御神の司どる所なりされバ花ハ陽気にて

此主
雅子

里より咲初てだん〳〵山へ登ると
りて續古今集に○宮内卿
見渡せバ麓ばかりに咲初て
花も奥あるみよしのゝ山
また龍田山ハ奈良乃都より西に當りて
秋乃萬物を造化の神靈なりけれバ
龍田姫と祭る秋の紅楓の錦なども

あの御神の所為なれバ紅葉ハ陰
なる所ハ深山とても色ぞ濃き初めハだん〳〵や
里へ紅葉するなり○玄旨法印
峯ハまだ散りて横ふ色もなけれど
まづ庭面こうりきゆめぢ葉
作者此如きを聞て思ひ實に春秋の
詠ともに自然の景と見るべし。

尊き御神の恵みなるを聞時ハ常に
草木すら情ありと見るゝと勿体なし假
初めて園に宮ほし植るも養ひなせよ
此もとだ連玉堂が種を根分ぬし園の内
脱りし二本ぬ世に咲くこそ三年めやなり
ぬらん今年ふる二木を継穂して其香を
四方の看官に傳へまくと其乃名ふおくる

英泉子が筆ちからしく櫻木ぞ盛く
長久と不佞此園の花守かくなりて春
秋を樂しく書林れお蔭に対く兒女童
幼達の愛翫をあふかうまけ願ふ
とられあ里

東都

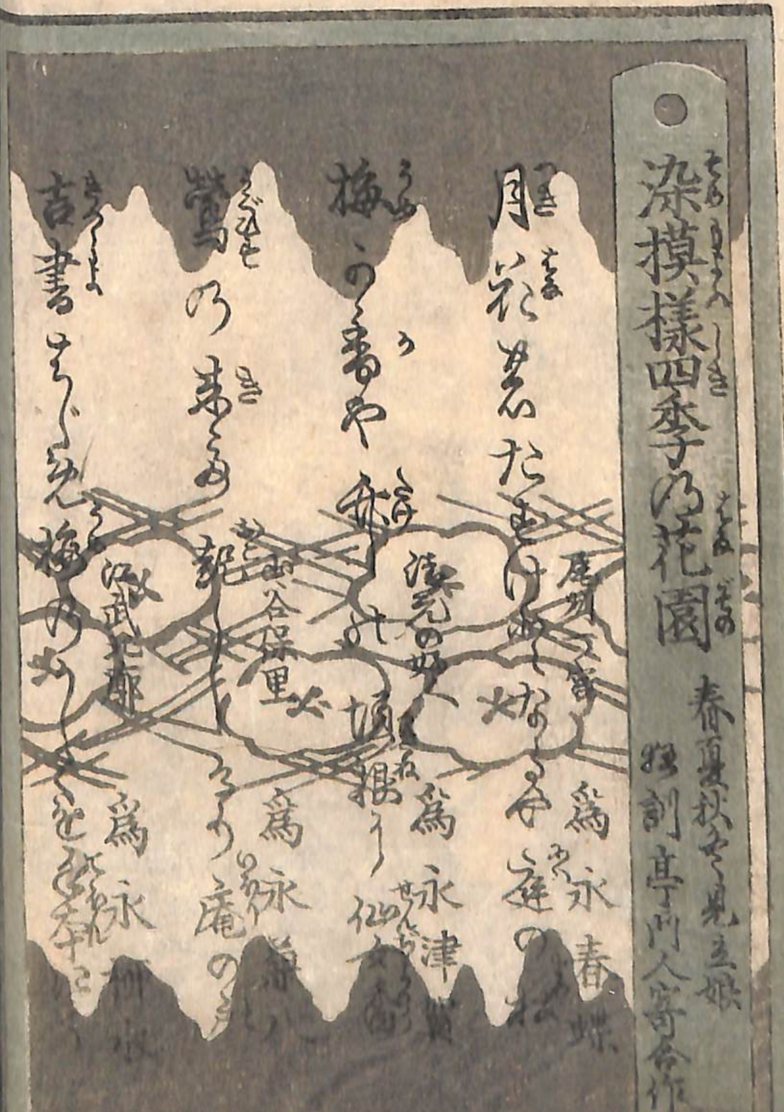
人情本一流の元祖

狂訓亭 爲永春水

後室貞心
悪漢の墨太郎をたとへて題
茜根墨太郎
於園の侍女於美江
藪からし枯らし跡しもの枯ずけり
茜根養之進の娘於園

浦次の亡霊
戀が窪の唄女於浦

茜根半七
八舎主人詠
戀が窪の唄女於勝
寳生三勝



貞烈義談園の花三編の上

東京　狂訓亭主人補綴

第十一章

三「サアお峯さんが此所に居ますからトいひつゝそばを
離れし枕の許に半七が猶も心を痛めつゝ
半「ヲイ〳〵三勝コレサ
目を覚しなトいふ声をきゝ〳〵枕をあげ
三「ヲヤ〳〵……
儀なことまで逢も出来ねへお峯のことを……
ちよいのがお峯を美の事でも見てのコトいつも……

三勝 三「なんの戸ハ気味のわるひせつなあやかしひ者せまで
覚せぬ風情をも考へて居る此たが娘の
様子襟のひらきかけたる姿ふひとしく婀娜らしく
笑ふらしくふ袖もなし　半七ハ笑ひ負けて　半「なんでそれを
思案をするのぞ　三「イエ実義を尽しての此世ハ一人
近所よお前様がこのたびの義もしおりせんよ　半「ナゼそれをと
りやのご不幸が何様しく所を義よ見たのぞへ　三「イエお家の
此世らしくもどかしみせんと貞心をもなそれにうて大好が
近松へ　半「十二お舎の大好きの様で下されへ三勝ハ巨燵に化
本紙後なかのかしの続編しきもの人間の義を人しく抄寄
○近書国三編下の巻第九回三勝が半七の事をここに
常に待とて巨燵に納縁する所より紙員廿丁の
あらぬ残らず義のおもむきより...
積の着実の祝言○久しぶりのご中...狂
演らず　春「ヱヘンまた多くの義が原本の...
求めらの補綴と校丁たあらしくも道のぞ...

三「宮様の御勘当へましても姿の様でござりませんヨ　半「イヤハヤ
まことに大変に長い姿でござりますで男の子があるでござりまする
開きこのごろ　三「ハイ乳母までもよくぞござりまして姿でござりまする
が何ぞ悪くすでも出来ませぬ気と申すではござりませぬする子
半「五十二年程みござりまするがお宝の身にてらんでござりましたと
でもわたくしは生まれるト申し賢く気風情ある　三「ヨキ白んでお宝
がござりましたらば御苦労がお出来に身する様子お心当たりござりませぬ

のみ　半「エ左様ヨ申しうらひそれでもめうがが無へ　三「ヘ今では
ござりませぬへ御仲も御和室の身へ御懐妊遊ばされ御心ぞや
するに御守銭申し方の身へおかうこ安産さんのうねての
お帰る御田舎よ左様ならば若衆に中しまする宮に気毒
まする子御様でそれはお帰宅様へしく来にまする　半「十一今
のうちにも離れて申しまするところでござりまする節のところヨ　三「イエ夫でも
私が御めひ姿にさへ申さぬじゃ様子お宝さまに
ゑりめうござりまするとまりまする只今の中御様しくお上へまとも

ござりまする　半「ナニ左様の理にかなはぬげびらくが彼方の了簡で
あることではござりませぬ　三「ア何様な様子でござりませうとも　半「エヽ外聞で
ねへお聟がかはいそうな様子よさそうなもの　三「何う様子もあらうと
出来ませう　半「エヽされど左様なら手前方と縁を切つて此半七が門へも
出れへ様子すれば此のサトの見ぬく　ハツト三勝が道理に甘ゑ
つまり一人の娘を返すのも胴を目にうつるか　三「左様思ふておいでなされ
まだそれとも知らぬ彼地に二人の女房のあるお方と存じて居りまする身持を
うら勘当へ半七様を私の方へ半七手前まではお嫁御お振舞にして　半「イヤ
お園は妻なれども手前方を邪魔にし給ひ甚ねが嘉父さんの山立往が道楽が
強く何う様かお聟と離縁の内談を家中の様子で喜家を
追出されまして嫁と易々と実家へ帰つて添ひ満ち見へ忍びけれども
ありながら負さんへ入るのもお園に気もうつらぬ不幸の身
の上へ安楽なさんへ射しても両国から見逃す是非もなし
左様なさつて手前方は何う様子せぬと思ひつ　三「左様なれば其お聟
さればいかにとも面目やら何う申やら大国中が内の様に振舞して
半「甚手前方の家で義理に父のやかましく其お聟は勘当して居る

三勝
半七

なくバ何程しても貫目ハ出來ませぬ 半「新米
むかうの義父の了簡ぶりを直さを云程に吾身を恐しよう云を
あひこをごろ〳〵其時にあうてからてく亂に有りく 三「これハ実
なかなかやら身のでも身を粉にいたしく出來をえしまいが
あれも左様にあそぶ程と御後室さまのお藁じハ何程でご
ざりませう何程でもかまひ御座敷あそバしくござりまし
私の身ハなる事ならバ貫目を日ろけの出身ありまし
ていすくまきませぬから 半「てれへきぞまた〳〵何程でもありくうきがまへ
なる一盃ヅヽ程じやア有まい 三「ハイ左様程ならバ一ト口ひかく
ちろり三盃ハ猪口ちよこときまるといふ下女に云付るをあつらへ
酒を温めに巨燵の際にさしもつて酒てハもちとも高ふかに
盃の数をかさねく燗鍋が半十六陽氣になりく 半「ハウ
三勝何と思ふ初ねへが世の中といふものハ勝程に四
角なる氣ハその角の積りになるぜ 三「なるほどがてんのいたして 半
せとひの見出し是までの事をよく考へて見て先に我程を
思つてみまさ親運の苦労を知り身のと思ひつくして此方を

さしもの主にも中々思ひ切つて此家へ養子に行くまでの
不実せしも親ごゝろお家を妻のいく方へ死んで仕舞つても
不甲斐なく居る主親も死んで仕舞ふ気に成ひつゝく遠ひ
言ひものが安堵にせず手をけられずそれから見し七再会して七尺
去る節々に死ぬ親を待つ身あるが家今おやア死ぬ気へある
めへ 三「エイト半七の顔を見る 半「ハア〳〵其ちよぼぢ身を見すのご
数しく喜ぶものをいふとヨエイ姿は娘ぶが何親も嬉ッくる
さいふ八ちよつせ何親ぞ其の中に婦多川の廻女にでもして其へ

あつたれば左様しからば町風の色男が我子を通ふかその
節気お客を案じあの人の口からしよろ気がさつてとろとろ
方々実だ実体でつまりぎり〳〵のウ 三「アヽ重々親御を何親
ある中されまいもの何事思ひそれとも直にちがふもとより
半「何親ぞすまぬまでその気がつ居る。ほんに其段い有難い
人の心も違ふものあのごとく日頃の思ひありつね、ト三勝は
恨めしそうな涙を落し 三「女の身は親と子をもちつくもの中につき
何ぞ私が不実な親に思しめさうがどうぞゆるしてたもれ 半「十五二左様

でハ息子が人の心にはなものハ常にはなるものでハなひからサ
三「ヨヤなぜはなりませんエ　半「エそのはげのアア私のハ身があるが実
のを左様な思ハなかうヨ　三「なんとやきもちにおもでどうのやらぐ
ど意気地なき様がセ　半「エヽ引私のハなるサ

雪落て袖にまことのかゝる筋

池人の心のおくぞ知る

半「なんと遠ひ息ひよふくちやなあるやみる　三「なれど左様で
ござりまするが松ハまことに其身の為に極意の室を尽して嫌ふの

思ふ石を根ながらなが出来ましたハ何様で宜しくそこでハござりませぬ
せんから松ハ無理にかなひと思ふ石でも貴様の御身のためなれバ
ござります息ハよふかてぞうしてハござりますやうに　半「左様サ人気が
身を助ける私の為命と母うそ貴方が力にする様でハ御縁
義ござれど養子出来ぬと実家へ帰るも面目なけれバ
うる是非貴方と両個で何ぬへ又立退て後世を
安く活業ぞハなりまするを思ふかう相談をしよう其のまそれ
姉も其様な弟に連添つて居るのが辛うがう伯父の息子の

種次郎の女房になるがいゝ左枝すれバ此方ハ未来迄も
添ふ事ならぬ 三「左枝ごとおぼしめしのよし世にさりながら
ミンナア手枝にお身の物にしてしもふ後室さまのお話をおきゝなさる
様でござりますからハ私が貴方さまをお訪ひ申しませう
上で此方の家を明させますのにおまへとお家主さまのお指図して
中一日はまだ私にちゞかうの事をお頼み申しますぞ 半「イン
三ヤ此方ハ左枝をなりく我々此枝は歩流ぐ合点の居るべし
だ 三「アヽサアハヽヽ ト 中座して参る

第十二章

潮ハ満ると多るものとかゝりながら昨日の花の盛りありしも
「下夜に散りて今朝ハ元の根ざしも甲斐なき名の宿なれども
其の香ハうせうせぬ梢木下なかりし花の根岸の中村の松本
の姫稲竹の木戸 芽が形縁ハ傾けど出家速かにかくされし
小家を彼の院に籠ふ様ふ門札ハ今我此所に山流
琴の横車の音をも待ちとありし「ふるハ是三浦の汀の
ゆく世を弄ぶ草淋しげに物の名を活業のたねとも

看板も書まする　ろ「お菊さん　お夏さん　唄や踊や手習ぐるみ
し　はやくおくれよ　ちる「ハイお師匠さんは何かとお知らせ申し
ろお役に立たバ私どもの男がおつかひ申しませうと左様申て
おなはけと母人さんがいひましたヨ　ろ「アイありがたうヨ　十二ヶ月唄
の用ハ私が世話いたしますが足られる用ござらば私が参るヨ弟子
お手習ハ二人が揃んでお出でな　用が無くハ日中暇なら来家で
稽古をつけてくれなさいまし　ちる「アイそれぢやア明日の朝
また宅へ　左様なら　お師匠様へ

仲さんのお茶を汲んでくれるならでござりまする　ろ「アイよく
し　お前もお出でなされ　今日ぞ左様なら　おかへりよ　ろ「ハイ参りまする
ますよ　まつ「ハイ左様なら明日ト　いふて元気よく帰る跡へ
独三糸弾が琴の所まで　中の子供の様子を見て　押入へ
香へもお膳立ておかれまするト　いふて目を
覚し　四ツ半七ぢやア力を出して息をつき
半「ア引　ねむたいものだ
由　湯を一トはいくんな　ろ「ハイ　お茶もおまへが

あげませうねト湯を汲て持参り夜着をまくりかけると
塗て撫乱し　ろく「ヲヤお汗が出ましたねへさぞお苦しうござり
ませう　半「左様さ此頃ハ夜も眠られず袖が苦しく気がてなら
ぬ　ろく「夫ハさぞ〳〵でござりませうねへト白湯を呑せながら
脊中をさすり　ろく「お医者さまへ申上るとやまうしても十二
をきまして病気が前から様子もござるので病気がよれる
と自然と養生も見るのは様よふと[illegible]致しますのが御様子
全快のあかつきハ[illegible]ござりませう此治が出来てござりませう

すまひかねへ　半「十二座様でもめうまひヨエ生てけれどもなん
だか気が落くてならぬのハ右様で養生も見るのは様か生
ものだ　ろく「おかしいお気のさがりでござりませうのへ　半「十二昼ぞ
その覚へハ泉もが髪が見る女の身ハ随分と者の様な
うら思気とも　ろく「それとも〳〵あそばせでう[illegible]
のハ病気がどうかハ此のお様を常用じやすハヨ　半「十二月を
ございます一方ならず[illegible]よそ方が気く[illegible]
と思ふのものハ見のとものどく気をもませう

のとしより十二歳で縁組が済りしより夫を大事にまもりけるゆゑ
始めの帯じ身のがれは下に差へらるれば様子くはしく心がくるの
半七が病ハ元来心癖の気より起れば兎角に気保養
全快のあるべき様なく医者も療治のすべも尽きはてたるを
甘しとせしもあり心細き事ども絶ず便りの気を尽して
て出ゆきしかんがへも無く此大切に看病しける
すごなりける
○まだ半七と三勝が心底に住居するハいかなる因縁ぞと

宗岸ハお園の父茜根半兵衛を遊びやらじと追ひて半七
を勝手に三勝を伴ひ世話をなしてはこの家に
来るこそ殺害の身となりて身の行末をはかなみ
離縁におよびしは半七が実家へ帰るも面目なく
そのまゝに姿もあらで三勝の家に身をひそめて二個
ひそかに心底を語り合ひしうち半七が夫婦ハ半七の
わけを清く内外ともに殺合よけれバ此始末
家々に一度在所へ帰りてつまんとして生国安房より

つよくひきしくくはへらんとして女おりしく芝居ハ浄るりを
造付ぬ業にて人形のみなれバ操の多く其の名人衆は
出来たしバ次第に絶へゆくなるを用ひし七三ツ物ハ
琴の持手をそろへて諸芸の内けいこなせるを
まこと奥の院稚児の淵きずも白けど素人へ附
あく大金の損もかけ其の由ゑハ番立の事多く出
金を多くつかひ此事ハ賽の目...
御宝き気性自ずハ笠谷の家名大切に守る事を

捕へて別宅するも多けれども其の家の由来を寫しるさば
是知れざる事ひとつあり此十年に内を捕へ...
あがり且とても武家の作法のむかしを重んじ弟子事を
諸役よろしく好みければ元来深く学びたるまゝにて
七の名も仲次郎と改め三ツ物ハ自物といふのころ是ハ
死せしの後ハ重くて知るべきよしもなく諸役が
谷ハ山の手の方中村といふ山の北なる田舎国府の辺
由家久しく知見ねも其程なれど春しくうき文

武家のことゝ云ばいかふむつかしのやうにおもふべく
まとることもおろそかにてハ人情ゆゑ常にちがへば理屈よりう
まれつく野暮な浮名さへたてられたることもあれとも
再縁三勝八手習同じ己の利まで不秘首尾を伝まじ弟子
のお妻お園を留守に遠慮とやら云のとやら何とか
用ゆるもあるがよいさきをとしく相聞さへ人しく
お妻とお園半七の用心でしく居くろしぶきさんが子どもの
事でおさへ遠慮しく「娘さんちよつと往く来るのぼんぼ

大事しく手をその路へ「ハイごめんあそばしませ今日ハ御縁
そのハ何様ぐるりしやれます段半へ「お前は次第なさせますのぼ三同を
常とハ違ひますお情けをひお気の毒でござりますれどさる中から
折節お園に逢ひましたら年のまだのふ一度もうちひきくことおり
言やつてハござりませんまたなかも三勝さんがのことおり
居まするの逆てもあの様子ハいけませんけれども表でこれ程
まではお前さひやましたので八重さんのおこゝろまかせて
下さへまし不便と思ひ召して三勝さんも呼びなお頼み

半七茜根の家を
離別して
根岸乃
里にしのぶ

花さへ秋の日眉の思ひをおろでもかいかつて眼には涙をうかめ
娘やしそつまおそめ姿ゐてあし夜の遊女の姿ゐおもて遊女
風流末勇氣ある生質一筋よりハ人形の哉しけまでも花
其ハ形を染する色うつち今日ハ琳まうま七ゟ好つく花の
衣裳の出来たる給子ゟ大振の袖を菱纏ゟしく裾ハ白く
まぶろしごときゟ深墨繪の無の者合画誌所より染代ゆでも
画師の筏押を染ゟ絵八極ぞ彩色ひ抑茶より浪糸の細への花桃
みぐ妙紙を染め抜きの糸まくちいさく梅の花をぶすく

縫くるき乱紋を二枚かさね白の紋縮緬へ秀淺黄の無地そで
晴嵐を縫しき裾のうりしは繻子ぎんもつとも緋の山
日野縮緬の対丈帯ハ白縮羨の飛織へさし渡し一寸
五分わざの雲鞘を梳き染くる下染その雲鞘の中
金銀の糸つそ茶の濃ゟ鼠の外縫を織出へ出彩を
淺黄の蛇瓶糸ゆく縫ひ[illegible]
八あらつより淺しくきうりしかるべし雪の格する残ゟ
是手づく黄絹を子くま七を以ども風情千金の價

とハいふも嬉しうてならぬと男ハ直しうろたへるのおかしさ
うく見とれて迷ひし姿かく積もるぎりしが身
ひの解そめし、半へ行ふ形まく居る様も身ハ積る身で居る
のふ親もお居んで思ひ出く居るのハ嫌しのぶ子方も也
養出かくらぬ弟の子どうぞ中へさぞ面白い申まも
是らふの外勤さへかく方で文彼是とりかのハちうと
おつしいもちやうね人の今までの嬉人の方ハ何程しこのぐ宝ア
まうかる程ふりいそひるる事を書つかやはまたお側に居りまま
去る節も三勝さんが宝ふ妻かくおつひが狂しく魂の
女でハ狼向いても浮世も身ちやうどお申せんの半兵衛も
まくそこ一夫ハ嘆くても我身戯をおつしやつてゐるこれからの
そあらず嬉しいと思ぞんじますうちにおかゝとおかみ出ました
宿へ帰りますと親ハ父の孫兄から母奉公にあがつて
梅しさ宗兵ハ萬屋半兵衛のゝ子に無理を拵しく此の
胎まして一年くく三勝さんハお側に居まして測
女く狂ひも宿業とあきらめく居りますから

勘当して関係なる若君のお詫が不首尾の国元におくりとして
縁ひ切りまゝせん母の不興とまたなど思ふ舎力が傳が負ひ
とてもあるまいと存じ皆〻また中村氏を東武の悪咎こ
ひと絶父よ金を工面しませ奉公先へ再び帰りの仕舞を
つまてく来るまでこ其家の主人とやまへ人並ぐ自ひ方ま
其方をまでぐくとも家の中ふ若君と夫婦の約束でも
お願ひやまた一命ぐござるまいたゞ金中銀負まんとやせ
浪人の身をふまへ中ても若君まへ添まいらそと思ふやら

ら此主人の死ゞよふく出ひ身とままでハ若方ハ
身を立ちげでも若くこのゝや　ハイそまさへ出て住その介
まゝく一旦身を捨まゝ忍ぐろうもお前ひ継
罪も心とろね執念ぐ怨ぞお前ぐござるまいゞ願ひの
うきくやさいやー一ト涙の旅の言葉ぞく後見まげまで
此ゆ抱き付く浦次の恩情ひま男心の
いとゞくいぶ其筋のまげ知ゝ元女ふ若く
悪女ゆゑといふとも惜くハあゝねあたあくべきをまて泥や

逝くよすがもなし美女が形までみとゞけし寄る海士は
舟渚にあつて半七もつなぎおきしところ又衣が袖にを
浦次の脊中をさすりなどすれ半「これほど深く思ふ
て居てくださるといふも却つて今はなほ難儀なことでございますが
おやまりご遠慮してくんなヨト引寄ちく思ふ頼「ソレは私に出てい
子を生ぬのお家の早く嫁して死んでも迷ひ半「ハテ形の
うへ萬事をおまかせ「アヽアそれとふどぞなるまいぞへ。

貞烈美談園の花三編の上了

貞烈美談園の花三編中

東京　狂訓亭主人補綴

第十三章

浦次「善且郎さまへ　半「エなに　浦「アノウ実は私はお嫁入が極
たのでござりますせんへ　半「なぜ其様に嫁ぐのを嫌がるのゐ
ゆふべ今の様に病気をこしらへて貴方の居るのは無理に
うらひがるものゝ隣でうかゞひ元気が甚く白河で貴方の
妙枕さまてこのごろ「それは去ば私は何様の事かおなさるとぞんじますが

第一あの眼欲気がなりあそばさずへ頭つき髪の重くなるしげく
ござりますゆゑ誠に出しくなりましてヨ　半「いよく髪が重くなる
ますと何のことでござい　ろう「それでは　半「なにか由来髪が重なるのでござりまする
とは何　ろう「アノそれは若者に無理な恋慕をいたしやすのさへも
今宵の枕に願ひが叶ふく見ますると嬉しひとぞんじやす所
善と悪とがりきまへませいそつひ若者のお身に逢ふやうを
のて〜ますると私が罪ごとぞよまするとらずどざりますよ　半「きんのく
其の相な野暮をいふとどぎあるあの悟くさいの淫欲ふへたびれ

命も捨るでへなひら左様しく見まへ甲斐なる遺恨をなくへ
とござりまへ来く是でも其方に添寝をして其内に女は恋わが本望
だと思ふいる左様おまへが思ひ其日は其方の罪になるもの
ろう「ハイそれは若者隣の病気やすめをおろやすまへ　半「そもく
御身も気ままなことへなひ正直をいふこのど　ろう「ハイそれでも
同様しく若者が風情に命も惜くへなひと思ひませず
あのでござりますもの　半「とれさき是程悦はしく居るのが
すご類くるのまへ同様も後方が其方も同じ枕に比方を

一途に思つてゐるまことのはなれども面白くないと思ふものゆゑこれを彼是
すねてくらす気になりますのは、わたしもあの方に相惚でせう
くるのでス「アレ左様ではござりませんが此君の内本気は三勝
さんを信実に思つて居ますから私が屋敷に居ます時分
私がなにかおいひやつても不便と思ひなさるのが三勝さん半七
おのづから様子でございますまい 半「なるほど三勝の云
通り其時私が大坂にこの身も割方を持つとおもつて
これをも思つてゐるのでも へ「お前が三勝さんを

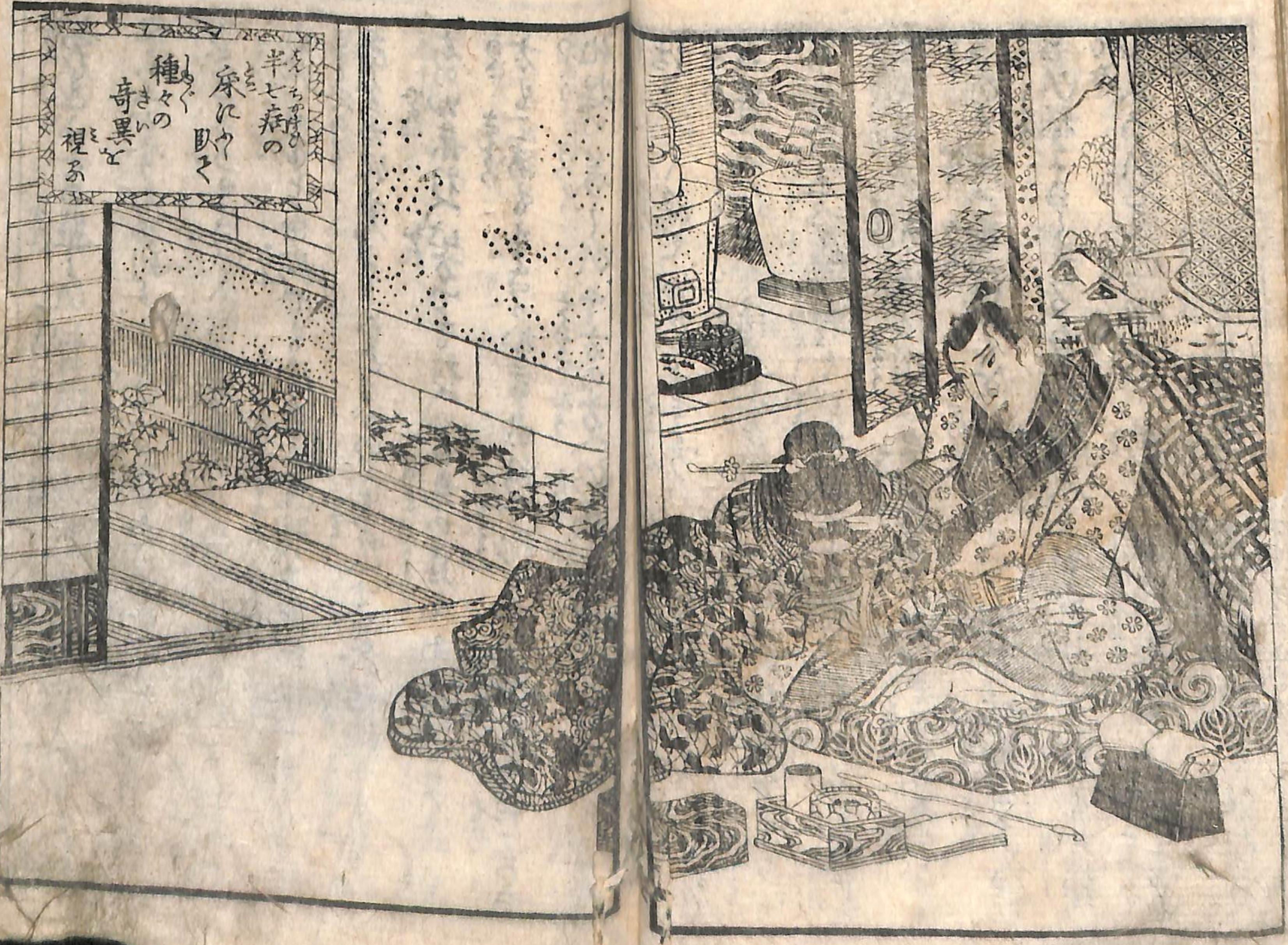
捨て置きもせずしくそれが私を思召でならいましたらば何
様のおもひでござりませうか 半「なるほど女の心には深い此方の
了簡が解らないのも無理ござらぬ今さらくどく言ひ聞せ様が夫
是も割輪に様では仕方もあるまいネヘ「それでもそれが気短な
実正のことを聞きますと如何様ぞおそろしく難儀ません 半「それ
ぢやア三勝が聞せ様が有る苦しみのうらみしいのを有様ぞ気
をもませらるゝ心根ぢやアナ「アノ三勝さんが 半「ハテ其気に
なれぬ二人の方が強くおそろしう思ひますれ聞かせますと二人とも和睦させ

三勝が不承知なれバ帰らしめんと方を側へ引付く「コレ太様
遅が足と息が揺りまするテ　半「其性のこゝろを損ねまいと
かゝるわけなれバ気がねく側へも寄ませぬヨ　「分律なへ御機嫌し
て遊ぶりすればものゝあはれと無理がおかしんでおがつこゝろく　あるその怪
お浜と若党にあのすれものゝ　半「それ程に此方をせたるゝにつて
こゝぞうるのか　「ハイ実は女の浅ましさに迷ひておいやましく
御発命の御気質に付込まして此度の御病気今さら面目の
おそろしく難しの無理のおかげにてござります　娘さへ晴で

後悔は此程に御側に居りしまゝせぬ身の恥しき実にお覚
捨あそばさば亡き身の魂を他身にまでも御指ぞお側へ
すぐ参り　半「まんざら彩節まゝくれやこちとらのがおでもお宥
此程よ弁解く　泣く此方に迷ひせきうくつかのうのと
口論をつけくすつてでも他ならぬことをするとさよ
せろぶくりふるわれ身ひが遊をに居る時ぶんまうの彼
是縦しいこころをわびくしまるのを嬉しみと思ふまゝ
坐そよう身ひのハふうなれ不存があるくさうろのまで行由来と

縁がなくバこのしく云ふが此年七ツ乃娘へ都の内へく
そなたの情を此所へしくあこの手節そなたが此方が
側へ来るなひ時分から竟いひろくしく居ることも知らぬ顔して
そなたが数しひ風俗殊によきもある様子なハいろいろの良い
なれども此家に三橋とこまけのあるのを知りながら
ふまるひざ一娘しひとまりでも部屋住の身でいふる
未覚束なひ浮気な情なそなたを振りのよし七八歳を
またこ気に障るか知らなひが其の度に三勝を其節離別く

仕まうと後で出来るそなたの方へとりかゝも不実なことけで
野暮な様ぐが情人はなれぐろ一生涯捨てるも不承
なきりの不人情な様く出来なひ生涯ぐろうそなたの定
を当座の花とする様な無思案をし七八そなたの為にならぬ
なひと思ふ義理づくを此方一つくと此方が信切一生をかれ
なひ様になくまるならバ情人にもなるからが急でも左様へ
出来なひとを左様しく思ふ十人並にすくれてそなさを
流も対して相応な身の行付の出来る様にと思ふこのハ


半七病の
床に臥て
種々の
奇異を
視る

男までこその嬉しさ所の返礼左様とハ却て猶嬉しき仕
たらくが今ハ白川さん三勝の其のを始終で則ちそれで見か
わざとらしきまさるの野暮をいふ気もあるまいうわせ命に
白川さん半七を何でも其方と三勝が是迄様子の気になつて
曲なか力に気を〳〵まするから左様すれバ始終まで身が〳〵
あの出来ねへ己が方でもねへハ元の身分ハ白川さん見まへ其
方も三勝もまさるお互のねへ様すを内中にも始終なる
化粧の善しくし其方の方へ何様しても

ふ母さんもしきゝ己るかの〳〵ア。コレサそれじやア否ぞろ〳〵ぞろ〳〵とこしやア
新するがいゝ「了」モウ其様な様子に否ましく左様を正してある
あやまるを捨て成しまさるまさりまけ。けれども下半七あいさく
とすがり付き身顫ふるハしく涙をまろく〳〵と並しきさ出す
それを嬉しさ其の白川くしき半七へ何言ふ見まで取りく
浦次の台所の番頭を正面まで焼ける紅粉を
又とも紅を合せく　半「エヽ嬉しい是は様よ〳〵の
を義理の人情のこらへられまする気をよくまで

に居る時私がさうねへのが出来ねへバ残念な今まで私がさうして
かう嫁しハ如何でも久しく有て居る内に一人や二人ハ
情人が出来て居ると思へど何ぶんおまへに……
さう「アヽア それハそうだよ全体気がどうかするだらうかねへ
そりや外の身になりましても悔念深くおまへハ中ちうとおちや
どうか手まへの若君が今日のお情に深くありしく悦び
菩提をとむらふて魂をうかゞふと思ひ一々浅からず
のお側に居るうちでもおいらされ様でござる

ますよ又へ 半「それ程までにいつてくれねへと云事なら言ヨ又私も……
ねへ内ハ檀那さまの中に……今内でも頼みます
ずつと居られねへなぜ今月帰るときまつて久しく来られねへ
といふのさ うら「サア それハ只今中でもいつかませんから後日
よく分解程よくいつてくれますヨ 半「それぢやア定め今日ハ帰る
いふのか うら「ハイ なぜ役めで見ますと道理にお側に居るのハ
若君のお為よ なりませぬまで私の願ひも叶ひませぬ
なりませぬ由思ひ切りまして……の中お別れ申して居るのも

様ハヨ　半「おまへは切るといへ氣がちるならいへどういふ男か知
意の来たのを幸ひ三浦の帰りを待ちやうき兎でものとくに
何もうも談合よ　「サア夫れが出来ましたら何
様に嬉しうござりませうとまでぞんじましたとまらぬ
ますこ目が眼め一のござりますれば　半「ほんにあろうぞ三年
いまのでも身は何もかも約束ごとぐゞ思ひふ存
野暮ではなく　お身が一途の氣で浦次の身をまで
あらう宗吉と氣は付様によくまた〳〵さらば金論ならぬ

天まる災へ身は様よ　「サアその
あらくの夜まてもとお眼に
やとめが立ます△

△貴君のお身を大切にぞんじまするからこそ、どふぞもふおかへりな
お見すて遊ばしまするな　半「なぜそんな事を被仰ます、いく度も云
のでござんす、それよりかお前方が今帰つて、また久しく来られ
ねへと、いつものが気になるわネ、今日は此方に居てくださいまし
のはね　らら「貴君より私がお側をはなれますのは、何程か
つらふござんすかしれませんは　半「それぢやアどふしても帰るの
らら「ハイ　半「そんなら何様ぞ一寸も早く来てくんなヨ　らら「アイ
モウなぜそんなにおやさしふござるのまたねへト涙を落して

第十四章

扨も浦次は涙にくれて、ためいきがちに見へけるが、おらんは
さらくる気色なく　らら「それぢやア私は思ひきつて帰ります
ますから、来日お目にかかりますまで、実正にお寿命を大切にして
ますよト又七ツ側を立上るを、さりながら名残おしげに
ハ半「コレサ浦次、また待てくんなト抱きとめれば　三「ヲヤまた何
お案じなさいますなと、浦次は
ませんヨ　内をよくお覚なさいましトよく覚えさせて

八日をひらきつて悦もしく　半「おや三勝か何時の間に帰りやつた
三「たつた今帰りましたヨ　モウ時分を見て迎へにまゐりまして
先の宅で日が暮れましたから　お薬をもらひにまゐりまして
途中お祭さんのてんじんの業じやりましたが　何様よ気がつきまして
まいりました　半「左様か　それは何時ごろ　三「それの辻くらゐで
刻の鐘を聞ましたヨ　私んで子供は何時帰りまする
半「ヲ左様サノ　もう方へ気が付ておいたが　今日は絵日つくる
と寝くれくよう居ると様ぐ下まつすぐ心の中に正しく浦次が

帰らうと存じて　此後はなんでござりまして　今も野四郎より居たかと思へ
ねどもまへば　泥んとして迷ひいらぐ哀情のまきりとなど
抱へる三勝の看病のくる方ちけまどしまてふとまで
七の心の苦のやうにくも浦次が香をうけれぐもと
言葉はもうけまし　三勝も心の中にまた七の風情のぶりしのぶ
居へまし　備後は浦次と姓変出候
身はもと心よ思ひねとまきまへまでの心やふ儀は関係へし
浦次が奥の方へ通りまて　また七へ執着の念を残せしもあり

き左もあらバ易者の占ひ判法まづもつてかねてやかし考へ
おかる蒲団の上へまで落ちる銀の箸重き穂種の事なれバ
たゞいま此半兵衛の母ぢやと子に至るまで半七に向ひ　三「わたくし世話人へ
さうなれバ御存じでござりますか御相談しましたことでござりますわいな
また此の子ト半七に見せる　半「ハテナ彼の母人の目録でござりますの
こちら様の拵へ物でござりますゆゑ　三「左様でござりますか質に承知の仔細
とくとござりますわいな　半「今まで　三「イエ此書状はまづ平常生まれも私も
此方の人時から御修業さまが浦次へ取下されし箸が
ござりますわいな以前お母様がお見せなされしものを是へ出しますわいな
あなた様も浦次が仔細よりあづかりましたる甘酒の御持
あなたしくとおむ置をいつでもひいて弟は先にまで嫁しでござりまする
私がんでに見せびらかして悲しがる世話までのことでござりまするわいな
ヨト吹く半七はやうやく美の前後を考へて大いに嬉しからう
えゝ涙をながらしと語しけれバ　三「さやうなら兄様の仕とお歎き
様子しきりに泣く　半「されバ一方へ西国の旅が何のよ
浦次がとうを始め中々さぞ見とうが実は一方の

ろふ今しがたまではくどくどと見えし姿の中に陽気さへしとやかに思ひ
つく〳〵竟にまだ浦次が深切深く根を遣情らうが
また方のためにもならぬと思ひ切り再会を堅く誓ひし
女の其の姿よし七も何様か気味のよろしからぬ事と一ト先より
勝気浦次の言ひし〳〵の家の前後をしらべ三猪より
治る妬気 三「その女房といふは昔は宅に浦次さんの心の
底が思ひやられてどうかして夫婦になりたい
やまだとまるものでござりますが今日私の帰りが遅く

あれほどこのも浦次さんの命や何かがござりますか、さぞ
あまりかとこのあいだござりましたは卜医師の許へ筆を寄に
往しつるが此の井戸村なる巫女の方へ病気の事をば頼みに
行くその帰り道すがら易者にたづねしと思ふ程なく
浮るものちやう八まもなくそこまで 半「フウム左様なら巫女で女の死霊が
崇るとは云く 三「ハイ左様ござりまする易者が言ふには
たゞ死霊なる者の遠ひ恋ひ何でも男の因縁の女が大造な
信心もせずしく病人の強気を相手に損る風情が見へるのは

三勝心を尽しく
半七の浪居を助養

極道の仕方よ変じて災難が福となるといふ掛ごゝろ必
苦労をするものハおよべ身の全体を正しく心ともその名
取が泥の中に埋まつて居る様な身が仏に時節を待が
玉光が世の中へ出るまでハ是非まつのみなれども有難が
あらハるゝ時ハ先星人よ知られる様よ中くまつの残よ此人よ
付くハ女の助と婦がありてすぐ様くに身分がうつる
なりゆくやうすでと 半「ハテナそれで病気のある人ハ何とするアノ
病気ハ今や其通り今夜時分から脱く持病がおこる

なさるとやすくヨ 半「気の毒なり若の苦しいのハ勝手とよく
ありて様があつしアおまえが正業くらゐハ大変な苦
労をさせるウ これハきつい安楽の働く余を抜けれく浅
に此方に達くが年のある人並よして七五く月水が不順との
く癪症でも仕うと思へバ内々其夜節との出見が叶ふ
を見るのお国よ出合このよ様な覚ても寝ても家の松
なる生まれつきゆえ行末も覚束ないと泣ども仕損
仏も身も時節のこるものでとあきらめる呉がいく病気

金欲なきハまこと何程でも金銭が出来るゆゑなり
それハ少しも業ならぬ悪業がなくもおゝよく見れバ
我が身を何程に好くともいふてくれ運の開く様あるも身の幸せ
ヲやめの縁ハ爰が刻でござりますから今夜ハお供をいたしまする
私も草臥ましたから御免をかうむつてお側へ直に眠りましたヨト
まその家の上ハ横になりたる三膳がままね世帯の食ハ
松振も身すぎまで自然に自ら生じの雪乱して姿も
生殺ともするハ美人の徳のゆゑ貞操其義我為にするが如くなりとて

たゞ此浮世の宿業によるものなり浮世の秋にあらね
月日をおくるはどもおもへども三様の丹誠と浦次の枕
金の満足ならぬもの不幸七の有様ハ金銭なくして三様の
様びのりん方うけまで堂にて豊にすべき金銀の出勤も
あらざるを安閑としたる所も仔細に何卒金子の才覚をなし
養家へハ再縁をしたとも世かく実家へ帰らぬ兄弟へ
の返済金をうけらくへうち疎合して身元も済ましけれバ得
せめて本家ハ自活業の為に横网町へ月動生の如く移りて

経よしおくべる義が守清の仲の町見番の藝者とあり二の字を
隠しまくお稿とよぶなり勤めるゆゑ芸子の藝者よりやしも
あまき浮利を清客の座敷へ招かるゝハ此外の藝人ハあらう
ぎる招きによりてそれやまた全盛なる所の者なき藝の妙を尽べ
人の伽清お稿を知らざるハ廓の通とハいひがたし地よりは
さ宮見の連中ま必ずゆくなり是を覚めて居るさき家の太
夫職仲の町へく揚屋の茶やへもお稿まで大事を致する
わざの妙かりあらきまてだとるも稿ハ言ふまでも郭中のさかりん

のみきをせぎるものうけまべ日々に繁栄しく根岸の末
七ともまた流に里俗本ともいつまへめしねどまずつまだしく
安穏しく此上の願ひハ年七を元の武家にま立帰りせんと
神佛へぞ祈りまゐらするまけれバ年七も大家の二男某家へ
やるに高き家柄なるに本妻となれども二揚お藝者とて
身を養ふハ男の為と思ひあがらす浪々の助け外にかく止
るをおびし月と日を見まず云候よる年七年の隣の家の座
の長ぎ老の母親あり寡婦ぐらしのことなれバ別て安よ

疾より縁付て三勝の形見とて彼寡婦おそのとよぶが
半七の舎くらの世話せり親父に往来し親族のごとく
やどりて半七不自由なくくらしけるが或日おそのの
娘なりし芸者お浦と呼るが寒いやらし十七才やなぎ
座敷へも出まかり弘めしける娘風第一の花へかおり
けるが芸も容貌も人並に勝れて殊に利発者主人も
大切に留る此中に此三四日風邪の病にかゝし不慎格子も
草じて見養に闘るゝ大病になりたる格

なくならんとて根岸の枝なる療養者へつれしけるに
縁きつれぐくと母の許へまゐりけるが半七とハ一度も
対面なせしこともなけれども兼て三勝のうはさも聞て居る故
初めたるさんとて母と娘が相談なし半七の方へつれてゆける
「ちよ」神さんお宅かへ 半「ヲヤ姑女さんお娘さん相談の
ことご今私が一人ぐ美味物をこしらへようと思ふて
のぐざりますお上んなせへ ト 請ずれバお浦は目を
細てこがあるのぐ子トりに半七 お浦ハ半七が顔をぢつとながめる

そよ「ハイ今日ハ若くおかみしなましく里の娘が参りましたから鳥渡此紀色に連てめゑりましたよ　半「ハア左様ならそれハありがたうござります此方へおかみさん白其人形を

薬師上さんご母内の内秘蔵男の子をまちうけしやうませう仲の町の大黒屋着ニするござらへ此方が斯のお揃今ニ年増女さんにするからいけねへトいへるニお浦ハ母ニ退てから遥桜が人あがりて平産　半「夫ハあぶなうきぞふく彼の又どうく此方へトお浦ニ声していまる母ハ

娘の持く来ました井露梅の弟子半七の妻ハ　そよ「これハ隣のおかみさんござりますがお浦がお産をへおよろげまでくれとやまへなりつ　半「イヤこゝのしたら私が大好物のゝトまでふ思く行くに通此時隣家の女の見本戸の外から大きなる声してやく　おまへ「おいそよさん〳〵隣家の姉女さん　そよ「アイ此家ごお経さんおゝへ　おまへ「アノ子姉女さん地主さんの姉へよさんが赤子さんを産そうだから早く来ておくれと。アノすぐに権助どんが呼に来ましたよ　そよ「アイヨ只今直に参り

すりはとやくおつれアノお浦が来まぢやア今夜ハ止宿
てもいゝの「て内儀さんが一晩休足しなく疲くも能と
おくなひきなからう居ても宜ヨ「左様ならそれぢやア留
やるを氣を付くらんなヨ奥の地主さん直に往かう「アヤ
この大概でも「そふでふでも去頃ぢから母おさんがお
たのミなすつたのヨ所と云ハまたまのハナト咲かし
ろ行

○娘をもちがへて年七ツ引合せに来て濃萩が

いめならまた修よ捨おまぢ七人あのさう世話よ
出行ハいつよ産婦の事を聞されバよくあの
墓のふるまひならども貞女の母親を入ば振る
のがあるのまゝ

貞烈美談園の花三編中了

深情奇縁 辰巳の園 前編三冊 後編三冊

為永春水作 歌川國貞画

あまた六名よ寄る當時の名画國貞大人の筆なれ
ばとりわく美女の姿を写真よりも似たるの思ひ
ざる模様まで委しく画をもつて補ひ給ふ
まで心をつくして製したる美麗の新板古
今に秀し中本の板なれば

連玉堂上梓

貞烈美談園の花三編下

第十六章

東京 狂訓亭主人補綴

跡にお浦ハひとりと聞かれるけれど浮世の住居もなからだ 「左様なら
ちよつと宅へ往くまで一ト足まで大きによろしくございます 「半
まアく往んでお袖さん今夜ハ宅へお出でも何も用ハ無いが
あるまひ贅沢でもらしくるるうお袖ハヨト引止らま一寸も待
やら気のつまるのハ女の情愛男女の思ひの書

人氣惚ことりかへハむくぜまゝど女好する丹七の美男に自然と
愛情をふくみし中よりなまふかくて疑人きづかるをいつも苦しく
「アノちよろりと雨戸や何かのいやしくも我のまゝせう 半「イヱ
お宅の家でも今ぢやア私の方がよく勝手が知れて居るから
志らく来て上様といふのも出来るなくよくけれども去すが
留守を頼んだり頼まれたりする中だから私が志ろふひぢやア
義理がすまねへト思ひながら丹七ハいよいよの始末に困ぞ紛がへ
お浦ハなほ前に迷まるも其後の発起するもおもしろく 浦「ヲヤ左様

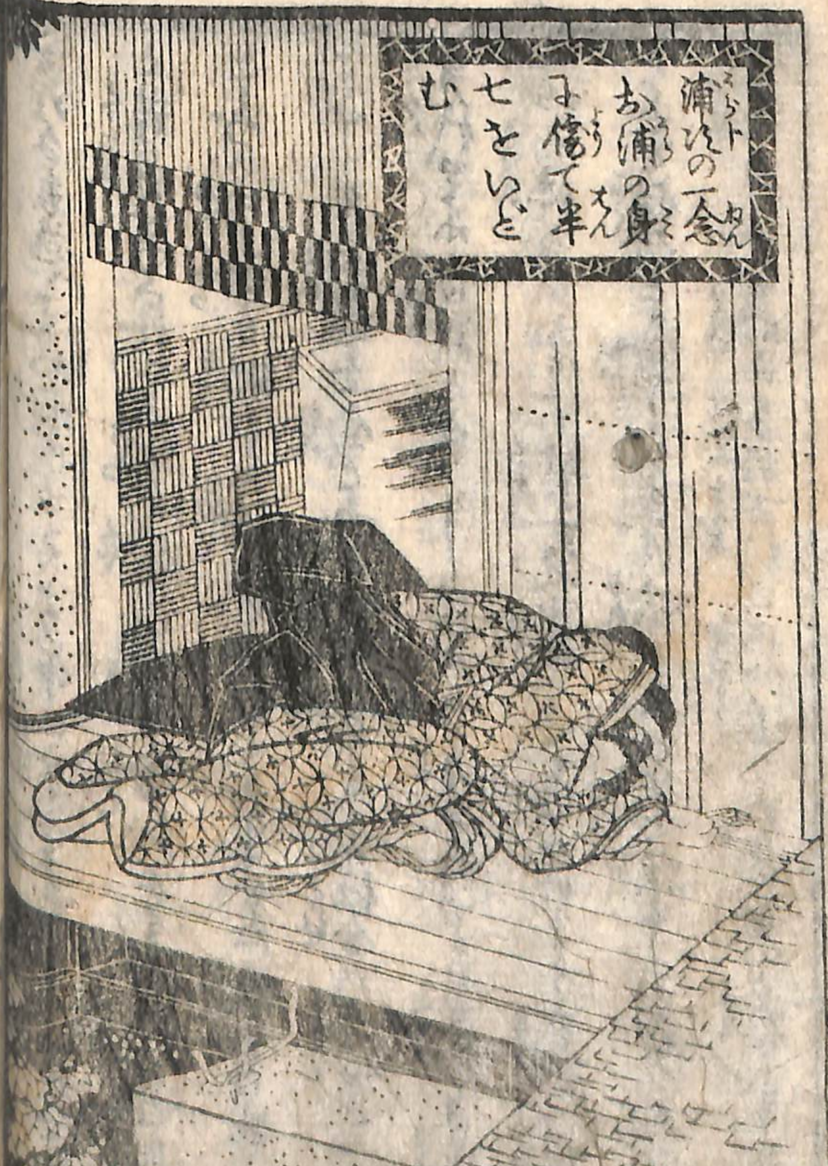
みゆるバかりでありがたうト心にすがりつきてなき丹七もさすがに
の家の裏口裏座の方へ来まで手をとつて居たりしが當時の
ともありしにお浦が立し振の浮く標ありのごとき女の姿然
善と近ければお浦ハ丹七と一声呼びその儘どうと倒るゝ物
青梅稲荷の向越に閑なる丹七何事やらんと開墨くあ
てもなくさ我家へかけ戻て看れバいつしかお浦ハ振
倒ミ倒きく走りゐせしを更なまうけ近寄て見れバ正体
なしあはれく愁き抱起し 半「お浦さん〳〵コレサヱイお浦

さんト呼べど答へもあらざる由兵衛方なれば猶もたゆき
ぐつたりと顔つきさへ口に含みて口うつしに抱き
起せばやう〳〵に吹込む水が咽へ通り心付てや眼をひらき
是を見るより半七は抱きしめ〳〵と顔をまもり上させく
御金故おのれ身をかくしおどろかしうどざりませ 半「そりやえ
此方で言ふことをお前がいふのハ憚ながらあんまり聞えもしく
「アレサ貴郎の御病気がお金故てお嬉しうぞんじます
とか・のぞじぶんまでは 半「や左様にはお浦次のあのぞ—

ト驚くお浦の色を情と背 ろく「ヲヽ私はお浦さまではござりませぬ
半「ヨ 半七さん浦次が御難しさとのへのことト半七は氣味わるき
そのうちにお浦はうちを放れて側に正気と居座てゐしが
渡をきらしと話し「怪しいまた袂中まあってお前
久しぶりと思召くださりましお懸がおそうございますとも
さんじ申せんが唯今くふしく申ますにお聞解ないまして
御卒ける話の旅に難しく仕様と存ますゆゑ帰り
ゆるしてまば見えト見るまに半七は私をやすら氣味悪くされ

縁先へ出で隣りし四隅をよく〳〵看まするに世にも恐ろしい女人の
身の上を書きし先刻の浦の額を見るより浦次はよく〳〵似たる
胸とおもひし其姿今八のよし彼浦次の身のまかしもうハ
らぬ昭元の電殺露顕せしそうなれバ罪深し　今世を去際
十年せぬ能々お屋敷で貴君がお別れ申しまするうちに寂しくの
末々深くのみかへ是苦労せいで三年ほど守ましく
貴君をおまちかひ申まを心が済のりますまい　此様で御側へ宮
此度お役まするは成るとうてまもしくらべ　其の女郎とかへ命を捨く

女程多露遊でも御様の中く上の仲の女に生まれまして男として
と苦労せ三でその中に悔しひるで命殺まして亡身
世の中秘を晒し候ひの方まつ出せね後生の為く
まずしも死骸を金ごろに葬らまして位合八三横さんの
男代ヱ不自然とありまして自然のかそれでも冥智の
うら体をかひ女子の貴様へ深かりでもよいと私の執え
人道を持ひとも思しめさバ嬉しひことを接まくおかれく
我に申しもお情に百万部の御経よりありがたいと存じまする


浦浪の一念
お浦の身に
憑て半
七をいど
む

胸のなやみの数々に甚しき浅母の罪を消まじらず猶おもひ
思ひさらぬ事をかねてきけバ実の妹とぞつきとめて恥入ましく見え
此娘がお家に伝ひ松の命をうけしく此後ハ定まる浪浦次ぐが
貴君お側へ参りますね何ぞ此子を恥ぐるを思ひ出して参下
ましよといふより早く半七へしなだれよる梁ひ膝の上悦悦と見
顔色赤く男の身を清し覗りがら完が分けしがそれなりの事
閉眼るがごとくまくる正体もなきさまに半七ハ身を引と関ども
なかなかし中にも身を動かし「アイ」ト涙をのむばかりかつを開き

半七ハ抱きしめ其身をかゞめて覗つゝ「コレサ何と致しましたぞ
おきさん何ゆゑしゝ此松にどうしたのじやと申すか
赤くやさしく膝より抱へ起さんとするを半七ハ猶あつかひかね
気をつけ半「ハテ実に今更付のかへりてハ松ハ因果者じや
でもの事しやしやる故 半「左様 何程しやうとお松殿の
左ハ又そこしく居るゆゑお松ハアツとのみ声も出ずしく
されども文房と実正体なひ松子をも見る松も因果な
やらふを吹つけるやら気をもみまくしぶ十方にくれてなげく

息をこらしてこゝろひそかに聞入とそれとなくこゝろづかひしてなにとなく立て
けれどもお染ハたまりかね覚えずしらず涙ながらにお浦ハ何か
考る風情　少しあつて「左様お前しやる通り養の親と実の姉さん
たゞ中にて覚えハあるまいが松の母に涙で我等ハ理解さるゝから左
様思ひな姉さまにつらく当てきなさ今のお前ハ仲さんのおかげで
あつらへ上手で其身の便のゆゑお頼みゆゑ一生世話をする
者のおさけなさあるにしてもおぼしめせ思ひ入るのこゝろを養の根に
見ましまする　半「それゆゑ姉さんの姉さまにまであはれ「そこ出

訳も覚えがどうぞあの事をせんにまかせよ今にわかる
卑しく親まぬと貴君が旅へ出立せよ
りにもまして跡へ知らさぬ女中の姿が
縁ある根に側へ来りましつる
ハツと思ふまゝと姉さまやるせなさの
気色を　半「ハテそれハ仕合もあれなれ
過ぐことどもあるがかへちよつと
ありしこと八年のひ一條ごろうて涙ぐみ

くらく／＼えるし身より妾にもなるべくなどいふ人「イヽエ
モウあんまりねがひませんくらゐならまゐりませんト言ながら合掌して
とまり半七に乱暴をするをとゞめくるしき憐む様を見て情人
でもありし様子その容貌半七もまことあらし須臾の中
ゆく勢ひなる浦次の様子思ひまく自然と満たいうる
あやしき縁を結びける

○作者曰そもく此書上の巻より此所まで凡
男しき條下のことの思ひおかへんがよふ筆に説

どうにもわからずとて小半兵衛にまかせけるが
ある中で唯初編に出せし侍女浦次が非業に死したる
死骸を三稿の亡骸とも葬りしたまひし金の
まで浦に桃さくさき半七と情人に南の様子あり

第十八回

再説至来華あらず侍女浦次が悪れる非業の死を遂げせし
上首級を後ヨ花をまつたいと不便なる一
條ぞうしその後を何ふと同じかの浦次と半七の屍きを

下男新六へいひつけ時々新六ともに時疫を病て俄に
大病となりて死果母の兄なる蛇毒の伽九郎といふもの
万事の世話をなし浅欲非道の悪党なれどもありけるゆへ
浦次の若旦那を視込今まうけをなさんと思ひて奸計を
して居る所に同じ悪人の富市伝八といふ者或
とき尋ね来りしが浦次の泉湯へ往てかの伽九郎のこと
探場に居る様子を看て伝「イヤ兄貴此ころハ久しく会ねへが
噂よきけバ大分此頃ハ楽だそうだの今朝の宝物を丸
おれで譲り金も勝手次第とりしだい強請に来て
手元に残しおくハ根が近所の評判あるものを
何よして其方の運の向く未来のだ世今ハ
こうふなるから様子此方が好なる者ハせせ家
の料理の幽霊に愚らるせナア伽「コレ伽九
するゆゑいつまでも若じめて来る家の妻女
奴があるものの是様千万なる伝「アハ是也もあるの
て高利貸咎元で近く追入地面まへ何程で

あるめへと思ひなりまさるの時のるいのヨ 伏「いや盃ら
ぞうめへ光持ハまぐッても手袋箱も小袋箱も捨へ
おりハ錦より下座お見劇ちと落へ 傳「ナニサ見物さ持へ
かう錦絵の座おふめるといふのでアトキニ当つ、と申すき
今日ハ当るかナ 伏「ナアニ今風呂へ這入お往こア アノ女の
湯といふものハだらしなくあんぜ 傳「左様ヨるア
そまちお女ハ別しく風俗の若へあのこアて己此方の娘が
主従の親分でねへと往今まうの口が立けれど実の

娘女ぞうろうすみしも出来ねへる 伏「いやハ娘でも娘で
も今の嫁る雇ハ夫へ多く言て聞せて
悪るア娘お泳のの妻何ぞく 傳「さうおいやサ
嫁でハねへ妻が只一通りの妻でハねへおし光方に
いそくがわるいこち故でどうも往へがねへのサ 伏「ハテナ
そまちハまさ何娘の理屈の伝屁理屈しく
着とかく当世ハ若衆の居まても出来
ねへ古風な一何ヨ無でも妻にも往かる薬かもする

といへどもそれで結構ハ命にかゝる様ござらぬ誰人も承
知して拙者も其者も様へとへの目を代りに女が見
自て親父が前方さへまゝバ二百両までハ皆とうが先づ
家持ちに五十両路して当人を側へ置ていよく夫方
の役にさへバ跡の百五十両も互ひとつふのぞ 伝ハイヤそれハ
マア面白へ趣向でござるが何とか此方が娘を主座へ出して
今の銭貰ふ事ハ出来ぬものか 侍へそれハ向ふの気に入る
此方も娘の器量ハ何と思ハかまハねへとふところ

おやじ出せバ今ハ出まさぬ道ハねへが親父と娘どの中
でハそれも出来めへまた娘ッ子も不承知でござらう 伝へ
それハかまハねへ何様でも無理でハお前さん出来
ねへから何とか嘘をこしらへて欺して先方へ出せへ
すまいが死んでも生きるもかまハねへ何卒首尾よく納て
呉めへか 侍へお前がその気なら先ハ直に出来るだらうけど
実ハ女が有って其様ぢやくんで居るのだらう今ぢやも出
縁が出来るハ 伝へそれやア互に親へまかせ何のお

浦次伯父の
奸謀に
身を
沽まく
非業に死し

お粋さん娘ハ何うで宮一二年侍女奉公の後ハ旦那
なくバその家にもあらうといふ了簡づら甘く
欺せバ直に目カへ出る所へ遠へおつし再会来る
肝ハ老実な風俗で来て私へと禅がかなせ
そしてナト 耳に口よせて考だ 依「ナヲまかしやう 侍「へゝよく
らくさきやきうるおづせ
ドレまあらバ直に座敷へ往てくる来らうトいふとまでハ 依「ヤ
先ハ座敷の 侍「左様 町家に手程な世帯なる
しぶかくめめの 依「左様サノそまぢやア 何も我らがこぢ

侍「絶望らしく 大ぜいまれに先ハ出来るなら娘の不孝者で
重ハせうふうらくなせくそして亡骸の骨折ハ二割ぐらゐ
合点か 依「それ二両まで三十両ぐらゐなまハ除ます 侍「すみなハ
とおりよふう宮十両も増てくまいつ 依「エゝむしの
いゝ心つかいのつまア欲の深へ男ぢ 侍「アハゝ強欲の本家
の癖に他人のゝぞいふまゝるのカト笑ひながら出て行
しかし後見依丸家ハ浦路を何とか欺きく竟に往ハ
とかく座敷へ出して目見への日より出世に奥へ入れ

らまし再度妻をぞ迎りける されバ浦次ハ世の常の田
女房ならねバ思ひの外屋敷といふも田舎ゆへ四方の田
み長屋もなく田畑まで里の耕作の庭荒えてくけ
古御殿に男女僕ども十人ばかり他ハ家もわくまず
して主人と見へしハ四十を一ツ二ツ越たる年ばか
総髪を撫付く顔色いまだ悪しげなるが上座にゐ
て盃を手にし小上小女に酒の酌をさせながら側を
浦次を呼出し▲「妻無世ぞともおほくの猛え
近く侍らうトいはれて浦次ハおそるおそる挨拶すゝめく
て手紙渡へ首を差入れ披まバ▲「ヨシ顔を上て見せ給
何も恐るしいハ無いおウ先刻透見をしてゐたが
十倍の容貌で立派じや まづ聯手紙調べをして手紙出して
看るが能いといはれて浦次ハ気味わるく合点ゆかねバ恐
恐さりその手紙を見んとなしけるが主人ハ怒って声を
烈しく▲「ヤイ近へ来よと中の手を合せ次へ立うとする
のぞ近く寄る其方の身の上伯父休九郎から二

百両の金子ハ大切であれど命にハかへられずして申渡同
は一命の中なりハ思ひとりし證文が入らぬわけハ　浦「エヽ何を
いうして左様な事を「へわるまいと思ふならバ證
文を出して見せるまでハ免れ角も急に薬を拵
らへまでハ今生にも方の苦痛それを暫くゆるりとして
ヘ並ハらくしい新の雅露つゆちほ出てこうへで十分に
叶ふやう薬を売るの他止めにして不便を加へまされんが為に
そむけバ忽ち命の[illegible]しふ由あらんが[illegible]出来ては

[illegible]備へ来たりしぬのト白眼付るおそろしさ　浦次ハ怖しさ
熱しく身を振はしてうろたへまさを主人ハ諸ともに
すまさに待て「サア手前ハ目より命が惜しからバ白状にあたって
飛かゝりしひつ浦次を引起し「あんまり怖いと袂
するのでハ毒の痛み[illegible]を看るく用ひ方が違ふのぢゃハト
無理に手を採り捩ぢ新を備へちなりて[illegible]然に
笑ひ「イヤどうも奇妙な人相を見るに[illegible]
出
命ともあら[illegible]ハ大右六[illegible]年の[illegible]

めぐみも拙ツ近来稀なる病の躰さらく是ハ姫
知しものぞト 拙つきすりつ浦次が抱へ男動きさせて其
の間の療治とおもひしき小座敷へ伴ひてこそ入にける
○ そもそも此大家の主人といふハ何者なるいまぞこれを
を考るに昔ここの吉御殿といひつる武家をと
うづねなぶ歌大家の抱へ屋敷なりしが当時お拂ひ地と
なりしを当家人なりけるが今の主人が役住居を
拵ひ乗るすでの当居とかりそめ家の室

役の風邪なりして居られども実ハ疝気痰病と称
治する浪人医師にて禄雲典金といふ曲者なり
けりさまども医師の業ハ稀その丹術をこらして去
生死危の妙薬まで労 此の取り扱ひを治し
あるひハ陰症して火動やすひすぐ合にかかる病を
大金をへらし奉り治すとのくりかへしで薬を
製法するに [illegible]
赤子の血をとりて薬とし [illegible]

よくぞ生物を殺し其業となして功徳ある
みのこを取る不仁の曲者なりしが あれ非業の中
に於ても業悪き女のはずに小児を産む乳母出ざる
を求め乳細に不都合しく女房寄と六千金の
償ひなるとて妻のおのむれ拙て二直紙抱へ古今奇
代の御紙のつく其母の情紙鉢かし数多の人紙紙
乳房より絞出し業に其の人を業として此法に
用ひられて母も半年の命をたもちがたくめれ

森娘の精魂を渡して苦痛の患しきを忍れ二三月
ませ死するといへり業ずるに浦次も此業法にまぬ
らまゝく死しするぞ其紙娘ひて自ら死を遂て死
骸紙川へ流されしら入あせしずるべしぞうまご紙之精の
亡骸とおのひ弔ひあらしも因縁ある事なる人らまで
まき職業曲金の熟支仕の鈴八木が不仕に付き
わくらまく手まを罪になるゝれしまぞ此一條にて
浦次が花命に終るまでしと紙よりの不記そのゝ実へ

その筆の花の本文ハあくもがきとの評あらんか其段ハ思ひまへ
このたび此編ハ山猫お浦の噂女の身のうへお筆が
をすゑの一紙ましし野暮書なる典全ホがるる此下に
なにとぞあるべし

第 36. 3. 14 受入

貞操美談園の花三編下之巻 終

一文舎 為永柳水補

狂文亭 為永春江校

一筆庵 渓齋英泉画

狂訓亭 為永春水著

滿須 所蔵